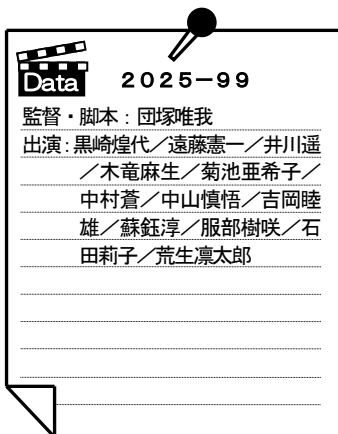




みどころ

1984 年の大阪駅前再開発問題研究会への参加を契機として市街地再開発問題への関心を強め、以降、都市問題を弁護士としてのライフワークにしてきた私には、本作で遠藤憲一が演じるランドスケープデザイナーとしての生きざまに興味津々！渋谷の再開発事業で完成した、おしゃれなガラス張りオフィスの社長室に収まる姿はそれなりにカッコ良いが、そこで生き残るための生き方は？また再開発事業の中での生存競争の厳しさは？

もっとも、26 歳の団塚唯我監督が描く本作の主人公は、そんな“おじさん世代”ではなく、20 代の息子とその姉だ。彼らがなぜ「見はらし世代」と称されるのかは私には全くわからないが、なぜ今の日本にはこんな若者ばかりが増殖しているの？こんな若者のために「手取りを増やせ！」と大合唱する国民民主党の政策は本当に正しいの？

どうしてもそう考えてしまう“団塊世代”の私には、本作の良さはイマイチわからない。また「見はらし世代」への理解もイマイチだ。誰か、本作の意義を分かりやすく教えてくれたりしないかなあ・・・。

■□■カンヌに注目！団塚唯我監督に注目！■□■

2025 年 5 月、第 78 回カンヌ国際映画祭の監督週間に、日本人史上最年少 26 歳の監督作品が選出された。オリジナル脚本・初長編作品でその快挙を成し遂げたのは、短編『遠くへいきたいわ』（21 年）で注目を集めた団塚唯我監督だ。公式ホームページの INTRODUCTION で、本作は次のとおり紹介されている。すなわち、

主人公の青年・蓮と、結婚を控え将来について悩む姉。そして母の喪失をきっかけに姉弟と疎遠になった、ランドスケープデザイナーの父。渋谷の街を舞台に、関係をふ

たたび見つめ直そうとする彼らを描く本作は、普遍的な家族の風景から、都市の再開発がもたらす影響までを繊細に描き出す。きわめて軽やかに、ただ、決して切実さは失わずに。観客に開かれた、新人監督の瑞々しい感性による新しいスタイルの日本映画が誕生した。

また、チラシには「BRAND NEW LANDSCAPE」という英語の単語や、「日本から届いた小さな奇跡 —ジュリアン・レジ (カンヌ国際映画祭 監督週間アーティストック・ディレクター)」、「自信に満ちたデビュー作 —SCREEN」、「日本映画界の未来は明るい —IndieWire」等の見出しが、さらには「—2025 年、未明 家族、東京、あたらしい景色」の見出しが躍っているが、さて、その意味するものは？

「都市再開発」といえば、私が弁護士としてライフワークにしている分野である上、さまざまな出版や講演、講義活動を行っている分野だから、これは興味深い。

■□■団家唯我監督のオリジナル脚本のストーリーは？■□■

他方、本作のストーリーは次のとおりだ。

再開発が進む東京・渋谷で胡蝶蘭の配送運転手として働く青年、蓮。ある日、蓮は配達中に父と数年ぶりに再会する。姉・恵美にそのことを話すが、恵美は一見すると我関せずといった様子で黙々と自分の結婚の準備を進めている。母を失って以来、姉弟と父は疎遠になっていたのだ。悶々と日々を過ごしていた蓮だったが、彼はもう一度家族の距離を測り直そうとする。変わりゆく街並みを見つめながら、家族にとって、最後の一夜が始まる

さあ、26 歳の団家唯我監督は、そんなオリジナル脚本に基づくストーリーの中で、普遍的な家族の風景から、都市の再開発がもたらす影響まで、いかに繊細に描き出していくのだろうか？

■□■見はらし世代とは？父親の戸惑いは？■□■

私に言わせれば、本作の主人公はランドスケープデザイナーである父親の高野初（遠藤憲一）。しかし、「見はらし世代」と題した本作で、26 歳の団家唯我監督が主人公として描くのは、渋谷で胡蝶蘭の配送運転手として働く青年、蓮（黒崎煌代）と、目下自らの結婚準備に精を出している姉の恵美（木竜麻生）の姉弟だ。この 2 人の母親、高野由美子（井川遥）は本作冒頭の「3 日間だけは家族に集中して」と夫の初に要求する妻の物語として登場するので、それに注目！

“ランドスケープデザイナー”というカタカナ名の職業は 1 級（2 級）建築士に比べるとカッコ良いかもしれないが、再開発事業に関わる設計、建築関係の仕事とはいえ、決して楽に稼げる仕事ではない。そのことは、せつかくの家族旅行を犠牲に少しでも、打ち合わせのために東京に戻ろうとしている冒頭の初の姿を見ているとよくわかる。この夫婦間の会話を聞いていると、妻の由美子も同じ業界関係者だったようだが、それでもこれだけ

大きく仕事に関する価値観が異なるのだから、夫婦関係の維持や子育ての合意形成は大変だ。

スクリーン上は冒頭の家族旅行のシークエンスが終わると、突如、10年後の蓮と恵美が登場してくる。そしてそこでは、由美子がなぜ亡くなったのかわからないが、母親の死後も仕事ばかりに精を出している初と息子の蓮、娘の恵美との関係が冷え切り、疎遠になっている姿が登場する。そのため、今は渋谷で胡蝶蘭の配送運転手として働いている蓮が、配送中に偶然初と再会すると・・・？さらに蓮がその話を姉にすると、恵美は全く「我関せず！」の様子だったから、アレレ、アレレ。そんな中でも、蓮は「もう一度家族の距離を測り直そう」とするが、今や初のそばには新たな女性の姿も……。父親の初と長女恵美、長男蓮との父子の断絶はかなり深刻そうだ。そんな中、「見はらし世代」の生きざまは？そして、そんな「見はらし世代」の娘と息子を持つ父親の戸惑いは？

■□■再開発で生き残るための生き方とは？■□■

私は1984年の大阪駅前再開発問題研究会への参加以降、都市再開発問題に興味を持ち、大阪阿倍野の再開発訴訟での実践とさまざまな「まちづくりの法と政策」に関する出版を通じて、都市問題を弁護士のライフワークとしてきた。それに対して、本作の初はもともと建築出身のランドスケープデザイナーだから、私以上に再開発の現場に密着し、そこで収入の糧を得ていたことは容易に推察できる。そんな初にとって、どの現場でどんな仕事を与えられるかが、自分が経営する小さな会社(?)の生命線だから、冒頭に見る家族旅行の中にあっても、仕事の呼び出しがあればそれを犠牲にして東京に飛んでいかなければならないのも、ランドスケープデザイナーとして生きていくためには不可欠だ。それは「同業者だった妻の由美子も分かってくれるはず・・・」。初はそう思い込んでいたようだが、実は・・・？

冒頭のシーンから10年後、初は自らが設計した再開発の現場近くのシャレたガラス張りのオフィスの社長室のデスクに一人座っていたから、ランドスケープデザイナーとしてそれなりに成功しているらしい。それに対して、胡蝶蘭の配送運転手をしている息子の蓮は正社員かどうかともわからない上、その仕事ぶりも決して優良社員とは思えないから、アレレ、アレレ。もうすぐ77歳を迎える私には、今ドキのバイトの職場で働く20歳の若者は、蓮のような奴ばかりだから嫌気がさしている。今年7/20の参議院議員選挙では「手取りを増やせ！」をキャッチフレーズにした国民民主党が躍進したが、本作の蓮のような若者をターゲットにしたそんな政策が、本当に日本国の将来のためになるの？私には、蓮のような「見はらし世代」は論外だ。

他方、1984年の大阪駅前再開発問題研究会では、国が多額の補助金を注ぎ込む市街地再開発事業において、弱小の零細業者や借家人が生き残れるのか否かが一つの論点になったが、再開発事業が大規模になるにつれてそれは難しいことが明らかになっている。逆に、再開発事業が大規模になればなるほど、高く、巨大な再開発ビルの中には有名なテナントば

かりが入居する実態になっている。つまり、巨大な補助金を含む莫大な事業費で施行される市街地再開発事業においては、今や生き残る者と退出させられる者との格差は明確になっているわけだ。

そんな昨今の状況下、妻の希望を無視して仕事のために東京に駆けつける初のような生き方は、時代遅れ！？そして、それから 10 年後、20 代になってもバイトのような胡蝶蘭の配送運転手として好き勝手に振る舞い、気に入らないことがあるとパッと仕事を辞めてしまう蓮のような生き方が、“見はらし世代”としてカッコいいの？私にはそうは思えないし、蓮はいわゆる“負け組”の代表のように思えたが、それはそれで自業自得なのでは？なぜこんな蓮のような若者のために、私たち団塊世代が納めた税金を使わなければならないの？

■□■最後の一夜に見る世代間の断絶（の深刻さ）は？■□■

本作で唯一私が納得できるのは、胡蝶蘭の配送の際に久しぶりに父親に会いながらもキレてしまった蓮が、今なお何らかの父親との接点、家族の距離を測り直そうとしていることだ。これは、姉の恵美が自分の結婚を控えて、父親のことなどハナから無視しているのと対照的だが、本作のクライマックス(?)では、そんな蓮の思いが、サービスエリアでの“家族の集結”という形で実現するので、それに注目！なぜそんな席に自分が座っているのかさっぱりわからない恵美に対して、久しぶりの家族の再会の中で、何らかの復縁のきっかけをつかみたいと考えている蓮の思いはよくわかる。しかし、そんなことがこんな機会にうまく実現するの？

「何か食べるか？」の問いに、蓮は定食を注文し、父親自身もカレーライスを注文したが、恵美は「お腹が空いてない」だから、取り付く島もない。そんな状況下、いきなり天井の電灯が落ちてきたり、亡くなったはずの由美子が登場してきたりするのは、いくら「見はらし世代」たる 26 歳の団塚唯我監督の演出とはいえ、私はやりすぎだと思うのだが、さて、そこから見はらし世代の中に何らかの変化が生まれるの？私はその点にあまり興味はないが、「見はらし世代」たる若者のあなたは、自分自身の目で、それをしっかりと！



2025（令和 7）年 10 月 27 日記